
ふれんど ♪

裕樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふれんど ♪

【Nコード】

N1076Q

【作者名】

裕樹

【あらすじ】

高校二年生の少年はアリエルト学園に転入することになった。しかしその学校は元気が無く誰もが自分の心を閉ざしてしまっていて暗黒のような学校だった。さらに自殺事件の穴埋めのようにして転入させられたかのようなタイミング。こんな学校になってしまった秘密と対決しながら少年は一つの目標を立てる。学年末に行われる全学年対抗体育祭で一致団結明るく元気に優勝すること。

プロローグ（前書き）

まず目に留めてくださってありがとうございます。すこし長くなりますがお願いします。誤字脱字も気をつけてはいますが、申し訳ありませんが注意してお読みください。

プロローグ

プロローグ

僕の名前は新橋優介^{しんばしゆうすけ}。高校二年生だ。そして目の前にあるのは校舎。ほとんど汚れていない門に、綺麗な自然、良い環境。

僕がこれから生活するアリエルト学園は3年前に創立されたばかりの高校だった。生徒数は全学年で300人くらい。つまりは一つの学年で100人くらいと言うことになる。

そして気になることがある。一つの学年100人いる中で転校生、つまり他の学校からこのアリエルト学園に転入したものが3分の1、つまり30人程度はいると言うことなのだ。さらにこの高校は男女比が圧倒的に女子が多い。元女子高とか言うわけでもないのに一体どうしてだろう。

おまけの全寮制制度もあり。基本は寮生活、もちろん放課後は帰宅できるものは帰宅してもいいがほとんどの者は寮で寝泊りをしている。

休日もちろん帰宅可能だが、それ以上に寮生活を好んでいる生徒が多いようで、家との連絡は電話でしてる生徒が多いらしい。

という話も全部先輩の受け売りなのだが。

この学校には仲の良かった先輩が一人いる。言えば僕も転入した身だから知っているのは先輩だけだ。先輩はどこから僕の転入の噂をかぎつけたのか知らないけど転入が決まったと同時に携帯に電話がかかって来た。

不思議な人だった。

僕はクラスの扉を開ける。

「うつ」

僕が最初に入った時、何か微妙な違和感を感じた。しかしそれは感じたただけであって、その違和感が何なのかは僕にはよくわからなかった。

「よお、久しぶりだな。会つのは年々振りになるだろうか」

ベランダの方から何か声が・・・いやこの声は聞きなれているぞ。この声は

「幸平・・・さん」

「おいおい、いくら何でもしょっぱなから呼び捨てか？まあいいが」

この人は戸塚幸平^{とつかこうへい}。僕の仲良しの先輩さんだ。近くに住んでいるということもある。

「ん？なんかこの教室へんじやないか」

幸平が小声で言った。聞き取れない距離じゃなかったから僕も伝える。

「そうなんだよ。僕もこの教室に入った時に何か違和感を覚えたんだ」

「うーん」

幸平が手を顎にそえて考えている。

「そうか、この教室は覇気が無いんだ。元気がない」

「たしかに、そうかもね」

クラス内を見回してみるが、友達と喋っている人はクラスの半分にも満たない数で、さらに笑って友達と仲良く喋っている姿は確認できなかった。

また半数以上は下を俯いていたり、本を読んでいたりといかにも暗い塊だった。

「でも当たり前じゃないこのくらい？だってクラス替えの後の教室なんてこんなもんだよ」

たしかにクラス替えの後の教室はこんな感じだったと中学時代の記憶を掘り返す・・・ん？よく思い出せない？なんでだろう。まあいいや。

そして幸平の顔を見ると、その顔は微妙に心配そうな顔をしていた。

「どうしたの？」

思わず僕は声をかけた。

「いや、優介は知らないのか？この学校はクラス替えなんて無いんだぜ」

「えっ、じゃあ転入してきた僕を除いてはみんな一年前も同じだったってこと？」

「ああそのはずだ」

僕は再びクラスを見回した。暗そうな人が半数以上。笑い声も笑顔もないクラス。一体去年に何があっただろう。

「しかもだ。お前が転入する前、多分このクラスだったはずだ。

このクラスの一人が自殺した。そしてお前はその穴埋めのように転入してきた。俺はそれがすこし心配でたまらねえよ」

「えっ、そ、そんなこと」

一度も聞いたことが無い。ただ急に転校を命じられて、そして僕はこの高校へ来た。だけどそんな自殺の話なんて聞いたことも無い。

「知らなかったよ」

続けて僕はそう言った。少し間が空いてしまったけど。

「この騒ぎは創設されてまもなくだし、あまり大事にはされたくないらしくマスコミは前面拒否状態らしい」

「あっ！」

「ん？」

僕は耳を澄ましてみた。

声が聞こえない。

普通だったら馬鹿みたいに暴れる奴がどのクラスにも最低一人はいるはずだ。

だけど廊下からはそんな元気な声は聞こえてこない。むしろ静まり返っている。女生徒が多いからかもしれないけどさすがにこれは以上だった。

「もしかして幸平のクラスもこんな感じなの」

「・・・ああ」

すこしためらっているような返事をする。

「だがな、俺のクラスだけじゃない。全学年こんな感じのクラスだ」

僕は最初耳を伺った。そんなバカな・・・で済ませるほど状況は冗談に追いついてなかった。今は休み時間。しかし何も聞こえない沈黙。いつの間にかおしゃべりをしていた生徒は自分の席へついている。

そして僕たちの会話しか聞こえてこない暗闇。

この学校はひっそりと存在を消しているかのようにただそびえ立っていた」

「どういうことなの？」

僕は幸平に聞く。

「そんなんわかんねえよ。俺だっていろいろと聞こうとしたんだが誰も喋ってはくれねえんだ。それに喋るのを拒否っているか怖がっている奴らもいる」

「そう、なんだ」

僕は返答に困った。これからそんな生活が始まるんだと思うと嫌気が差してきた。

「おっともう行くぜ」

時計をみればチャイムまでもう時間はない。幸平はベランダに縛

り付けてあるロープを上って自分の教室へ戻っていたった。
なにしてんだよと思いながら。

幸平が去った後、僕はやけにベランダに立てられてる棒、自殺防止用の設備が高いと感じた。やはり自殺の話は本当らしい。

朝のHR。担任が出席を取るが、呼ばれている生徒は聞こえるか聞こえないくらいかの音量で返事をしている。

というか担任からして元気が無さ過ぎる。一体なんでそんな悲しそうに出席を取っているのか意味がわからない。

そして転入した僕の自己紹介を10秒で済ましてHRは終わった。

ありえない。いや実際にありえてしまっているんだからそんなこと思ってしまったてはいけないのだろう。机の上には僕以外の全員は次の授業の用意をしてある。

トイレか水道など行っている生徒を除いてほとんどの生徒は本を読む、俯いている、予習しているのどれかだった。

相変わらず笑顔は見れない。

「はあ」

僕はため息をついた。

こんなムードなら自殺もマジありえるぞ。

「ちょっとあなた」

はじめてクラスで声が聞こえた。

他の生徒は喋った人のことを見て、また自分の作業に戻っていく。

「僕？」

目の前には一人の女の子が立っていた。

見事なツインテール美少女だった。クリーム色の髪の毛に少し大きな目、そして小さい鼻に小さい口。どこからどう見ても美少女だった。

そんな女の子から転入早々話しかけられるなんて、喧嘩を売られてもうれしくらいだ。実際何か喧嘩を売りつけているような喋り方だったしね。

だけど、状況が状況だけに素直に喜べなかった。

「そうよ」

やっぱり元気があんまりない。他の子よりは十分ましだけど。

「あなたさつき喋っていた人は仲がいいの？」

さつきの・・・幸平のことだろう。

「うん。昔からの友達でね先輩でもあるよ」

「そう・・・」

その女の子は暗い顔をして俯く。なにか考え事をしているような角度で。

「できるだけこの教室で話さないほうがいいわ。出来るなら廊下とかで喋ったほうがいい」

「なんで？」

僕はストレートに聞いた。

そういえば昔友達にもお前はある意味積極過ぎて困る。それじゃ女の子がかわいそうだぜとか言われた記憶がある。

「なんでって？そんなのこのクラスの状況をみればわかるでしょ？」

「みんな自殺の件でこうなったの？」

そうだとしたら、その人は全校生徒から慕われていたわけになる

な。そんなことはありえないと思った。

「違うわ」

予想通りの答え。そうでなくては困るけどね。

「じゃあなんでみんな暗い？」

「そんなの・・・知るわけないじゃない」

「あ、ちよつと」

そついい残すと女の子は自分の席に戻って予習をし始めた。見事に逃げられた形となった。

一時間目は数学だ。

「はあ？」

と声が出そうになった。

なんと数学の時間、先生からの指名はいっさいなく先生が教科書の問を言う。みんなは無言でそれを解く。そして答え合わせの繰り返しだった。もちろん前には説明もするが僕たちはただ単に黒板に書かれたものを書き写すだけの作業だ。

宿題も無い。指名されない。たしかにラッキーなことではあるのだが、おかしすぎる日常だった。

またロープで幸平が降りてくる。

「ちよつと来て」

僕は幸平を廊下へ呼んだ。

「ん？なんだ？トイレか？」

「違うよ。なんか教室では話せる雰囲気ではないから」

「だよな」

気づいてたら朝の時もそうしてほしかった。

「どうしたの？」

「いや、暇だから優介と話そうかと思って」

「幸平友達いないの？」

「あんなんで出来るかよ。それにお前だっていねえだろ？」

それは反論できない。たしかに僕もこのクラスで友達はいない。転入してきたばかりだからと言えそれは正しい理由にはなるが、僕はこれから先も友達が出来ないのではないかと思ったから言い訳は言わないことにした。

しかし幸平はこの雰囲気にも2年と耐えてきたのだろうか？そう考えると鋼の精神の持ち主かもしれない。

くだらない話をして休み時間を終えた。

「ねえ？ちよつといい？」

僕はさっきの女の子に声をかけていた。いろいろと聞きたいこともあったし、何より僕がこのクラスで初めて会話しただ人でもある。友達というまではまだ果てしない道のりがありそうだが、少なくとも喋れないと言う壁こそは脱したように思えている。

少女はめんどくさそうに嫌そうな顔をしながら。

「廊下へ来て」

そう一言残して、先に廊下へ歩いて行ってしまった。

さっき、嫌そうなめんどくさそうな顔の中に一瞬だけ、驚いたって言うかなんていうか、とりあえず別の表情を僕は感じ取った。

気のせいだったかもしれない。

「で？何の用かしら」

「ああ、悪いね。ちよつと自殺してしまった子のことについて知りたいんだけど。何でもいいんだ」

僕がこの学校に転入した理由はわからない。しかしこのクラスで

一人の生徒が自殺してその穴埋めのようにして僕が転入してきた。これは何かあるに違いない。

「私だつて何も知らないのよ。でも………」

長い沈黙。僕は次の言葉が出るまで待つつもりだったが、目の前の彼女は話そうとはしない。仕方なくこちらから聞いてみた。

「でも？」

彼女は俯き始めた顔を再び戻して。

「でも、あの子は死んではいけない子だったの。あの子にはこのクラスにとっても仲の良い子がいた、あそこの永森さん^{ながもり}」

指をさしているの僕もその方向を見る。気づけばその子は僕の隣の席だった。いつも俯いていて何もしてない一際暗い少女だった。

「永森さんも暗い子じゃなかった。仲良く二人でおしゃべりしてて、それにつれてクラスの雰囲気も明るくなっていった。そんな時に自殺事件が起きたの。もちろん永森さんは相当のショックを受けて今あんな状態。それにまたつられるようにしてクラスの雰囲気は暗くなつていった。私が言えるのはこれくらい」

「ありがとう」

「あなたもあまり首を突っ込まないほうがいいわよ」

それだけを言うと彼女は自分の席へと戻っていつてしまった。名前を聞くのを忘れてしまった。

元氣を取り始めた矢先に自殺した女の子。それにつられるようにして暗くなっていたクラス状況。この高校の教師も明るい先生はいない。ギャグやダジャレを言う先生なんてどの学校にも一人くらいいていいもんだ。

それがこの高校はない。誰一人として。言えば幸平は笑ったり出来る友達だ。だけどこの高校は異常に過ぎる。

誰かがこの学校は幸せになってはけないと、幸せにさせないように仕向けているかのように感じられる。

この学校の行事はどうなっているんだろう？

一日の学校生活が終わり寮生活のスタートとなった。部屋は一人部屋で相部屋も可能なのだが誰もそうしたがらない。

ということとで先生に了承だけ貰って僕と幸平は相部屋にもらった。学年が違う相部屋なんてなかなかないし了承を貰うだけでも一苦労するかと思ったが。元氣の無い寮長はそれを簡単に認めてくれた。

「つまんねえよなあ」

幸平が呟いた。

僕だつてつまらない。

こんなの青春じゃない。

みんな損しているはずなんだ。

僕からすれば半ハーレム状態のクラスじゃないか。

みんな損している。

何とか友達になりたい。

この学校にはどんな秘密があるのだろうか？

やっぱり僕と一番近いのは、今日もはなした女の子だ。次に教えてもらった永森さん。だけど永森さんは自殺事件のことでショック

を受けているから軽い気持ちでそのことを喋ったら大変なことになるだろう。やっぱりまずはあの人からだ。

「ねえ？幸平はクラスで喋れる人いるの？」

「入学した時は喋ってたけど、今はみんな心を閉ざしていて喋れる人はいねえよ」

「そつか・・・」

「ねえ幸平。この学校、学年末に体育祭があるよね。しかも全年対抗の」

「ああ、3学期にやるのは異常だよな。いろいろと忙しい時期なのに」

「僕、目標を決めたよ。その体育祭でみんな一致団結して元気いっぱい僕たちのクラスが優勝するって目標を」

幸平はぼかんとしていた。そして一言。

「そうか、頑張れ。なんか手伝えることがあったら手伝うから何でも言ってくれ」

「うんありがとう」

始まる。これから波乱の毎日が。

目標は一つ。

一致団結体育祭優勝！

1話 孤独な少女

1話 孤独な少女

寮生活の一夜が明けた。寝起きはそんなに良くは無い。二段ベツトの上には幸平が寝ている。

話を聞けば幸平は今日までずっと家に帰宅していたらしく寮で寝泊りはしてないらしい。ここから幸平の家までは時間がかかる方だが、幸平が言うにはこんなところで寝るなら家の方がマシということとで毎晩帰っていたみたいだ。さらに休日はほとんど家で過ごしていたらしく、休日中の学校の様子はまったくわからにという。

まあそりゃそうだよなあ。僕だって帰りたくもなる。

そして僕がここに来たことにより幸平も寮生活を始めることとなった。

朝食は購買で何か買って食べるか、食堂を利用して食べるかだ、もちろん場所には制限無く寮室で食べても食堂で食べても問題は無い。学校内でもOKだ。

それでも食堂にはまったく元気が無い。ただただフォークなどが皿にあたる音が響いているだけで一切会話が存在しなかった。

「幸平、部屋で食べようか」

「ああ、そうだな」

会話少なく僕たちはそれぞれ食堂で料理を頼んで部屋へ向かった。食堂の空気が怖かった。

「なんでこの学校こんななっちまったんだ」

幸平が部屋にたどり着いた瞬間に声を張り上げる。どうやら今まで我慢していたみたいだ。僕だって我慢してた。

「3年もいる幸平がそれは知っているはずの問題じゃないの？」
「そんなんわかるかよ。あ、でもお前に話していないことがあった」

「ん？」

「俺達のクラスも一年の時はここまで暗かったわけじゃない。希望に満ち溢れてそんな生徒もいたもんだ。だけど、とある生徒が一人いなくなった」

「えっ？」

その時の僕の顔はどんな顔だっただろうか。

「それから俺のクラスは今みたいに暗闇に包まれた」

「それって、僕のクラスと同じようなことおきてない？」

幸平のクラスは一人いなくなった。消えたと言っている。それはもうこの世界には存在していないのか、誰にも知らされず転校でもさせられたのかは分からない。しかし一人がいなくなったという事実は確かだった。

そして僕のクラスも一人の生徒が自殺した。詳しいことはまったく知らないが一人、消えたと言うのはたしかだった。

やっぱり、この学校には幸世になってはいけないみたいな呪いがかかっているような気がする。

「そうだな。この学校はどこかおかしい」

「んで、消えてしまった子と言うのは誰？」

「そんなんお前は知らない人だろう？」

「そうだけど、一応」

「・・・」

幸平は黙り込んだ。もしかして入ってはいけない領域にでも踏み込んでしまったのだろうか。もしかして彼女とかだったりしたらそれは誤らないといけない。

「う」

ごめんと言いかけた時に幸平の口が開いた。

「思い出せないんだ」

「・・・はっ？」

「本当なんだ。顔も名前も思い出せない。確かに話したりしたことがなかったからしょうがないのかもしれないけど」

消えてしまった人を忘れることがあるだろうか？普通は無い。やっぱり僕は踏み入れてはいけない質問をしてしまったんだ。幸平なりにそれはごまかしているつもりなのだろう。そのことを察してしまったからこそ、それ以上追求することは止めにした。

「・・・」

幸平は顎に手を添えて考えている。いや考えているフリをしているんだ。本当に思い出せないようなフリをしているんだろう。

「まあまあ、朝食済ませて学校に行こう。もういいよ」

「ああ、悪いね」

それから僕たちはくだらない話をしながら朝食を済まして学校へ向かった。そのくだらない話で少しでも笑えたのは良かった。

ガラガラガラ

扉を開ける。相変わらず重苦しい雰囲気は消えてはいなかった。

誰もが喋らない。誰もがおはようと挨拶をしない。誰も席を移動していない暗い教室。

僕は教室の電気をつけて自分の席へと向かう。勝手に電気をつけたが誰も視線をうごかさない。反抗されてもいいから何か言われてほしかった。

自分の席へと向かう途中に、あの女の子の席を通る。まだ名前も聞いていない・・・聞くのを忘れたただけだけど。今は何もしてないくたただだ人形のように前を向いているだけである。わずかに聞こえる呼吸の音。そしてまばたきだけでしか彼女の生きている証拠は確認できなかった。

「お、おはよう」

あつ、向こう向かれた。

僕はショックを受けた。精神的に一撃必殺の大ダメージだ。まあこうなることは僕自身予想していたけれどやっぱり辛い。

挨拶を無視したことを注意したい気持ちもあったが、なによりこのクラスの雰囲気には耐えながら堂々と喋れるほど僕の心臓はタフじゃないので自分の席へとしぶしぶ向かった。

はあ。

ため息が出ていた。

一時間目の授業が始まる。言わずもがな誰も指名されない。指名されないのも誰か喋らない。誰も発言しようとしめない。沈黙の間が50分と続いた。

だめだ！鬱になる。

そう思った。

このままだと自分もお先真っ暗ダメダメしよぼしよぼダーク人間になってしまふ。それだけは嫌だ。

「よおつ、どうした悩める少年」

一つ上の会からロープを伝って降りてくる変な先輩がいた。いや、今となつてはその変な先輩がとてもありがたかった。

「とりあえず廊下で話そうよ」

「そうするか」

僕と幸平は廊下に移動する。廊下に行ってもほとんど変わらない静けさ。ただクラスメイトからの冷たい視線から逃れられるだけだった。

「で？何のよう？」

僕から口を開く。

「特に用は無い。話したいから来たんだけど何か問題はあるかな」

「特にはないけど、なんでロープなんて使って登場するのさ？」

「移動時間がもつたいたいだろう」

「とんでもない人だった。きつと自分でやるって決めたらとことんやる人なのだろうと思った。」

二時間目。沈黙の授業。

結局午前中の授業は教師以外は誰も一言も喋らない授業となってしまった。

いやそもそも授業中に私語がないことはとてもいいことだ。そう考えると教師側としてはなんと理想的なクラスだろうか、ただ私語がないのは素晴らしいがそれ以上に何か負のオーラが充滿しているのは問題だ。

昼食の時間。教室でのお昼は遠慮したいので僕と幸平は食堂へと向かった。

食堂は・・・以外に人で込んでいた。暗い雰囲気の中きつちりと列を作つて並んでいる。僕としてはかなり重苦しい人たちだったので教室でとばとば食べているのかと想像していたが違ったみたいだ。僕たちもトレイを持って列に並ぶ。

「ん？」

僕の目の前の人。後姿に見覚えがあつた。この人は・・・

そうだ、今日挨拶してスルーされた女の子だ。

彼女も僕のこと気がついたのかこちらを振り向いた。がすぐに前を向いてしまった。

「ちょ、ちよつと」

僕はすぐに声をかける。誰も喋っている人がいなかったなので僕の声は回りに響いた。かなり恥ずかしい。

「・・・」

彼女は再び振り返る。なんか目つきが怖い。

「あ、あの」

「すいません、話があるなら昼休みに廊下にでも」

「あ、いや別に話ってほどの・・・」

名前を聞きたいだけなのに、なんでこう疲れるんだろう。しかももう前を向いちゃってるし。

彼女はそれ以上喋る気はないようだった。声をかけてもつついても振り向いてくれるような感じはしない。

僕は昼休みに廊下に向かうことにした。

「なんですか？」

相変わらず何の表情ももたない仮面でも被っているかのようなぶつちようずらで喋りかけてくる。中学時代ぜったいコイツ友達いなかったな。と勝手に思った。

「いや、その名前聞いてなかったから教えてもらおうと思って」

「はあー」

彼女がため息をついた。

「そんなことのために私に話しかけたの？」

「そんなことって」

「じゃああなたは名前を聞いてどうするんですの？」

「どうって・・・ねえ。これから呼ばせてもらおうかなと」

名前聞くだけでなんでこんなに時間がかかるんだろう。実は恥ずかしいのかな？彼女の顔を見る。全然そんな表情は見せていなかった。

「そんなことで時間を無駄に使わせないでください」

「あつ、ちよつと」

彼女は廊下をまっすぐ歩いていった。

「ん？」

足元に紙が一枚落ちていた。それをゆっくりと拾い上げるとそこには『和仁志美耶と書かれていた。丁寧なふりがな付で。』

これは！！

・・・

どう見ても名前だ。

なんて漫画みたいなことして行くんだろう。

自分の口で言えばいいのに。

恥ずかしがりやさんなのか。

だけど、僕にはそうとは思えなかった。なんでだろう？ なんとなくのかな。

*

「和仁志さんっ」

僕は無理やり巻を出しながらも、クラスの暗い雰囲気をぶち壊すようにして元気よく呼んだ。

「・・・」

相当驚いているのだろうか、瞬きしないで目を大きく広げている。そんな不思議なことを僕はしただろうか？

「どうしたの？」

「それはこっちのセリフです。あっ」

しまったとでも言うような顔。和仁志さんは手を口に当てて焦った顔をしている。

「廊下へ・・・来て」

そう言うとき和仁志さんは廊下へと去ってしまふ。

彼女は廊下が好きなわけじゃない。

最初声をかけられた時、こう言われた。

「なんでって？ そんなのこのクラスの状況をみればわかるでしょ？」

クラスの雰囲気になえられなくて喋りたくなかった、と言うのももちろんあるだろう。だけどそれ以上に和仁志さんはそのクラスの

雰囲気がありがたそうにしているというか、このままの雰囲気の方がいいみたいな感じがしてならない。

そう、誰とも喋りたくないと言っているように。

「何のよう？」

この通り返事はそっけない。やはり人との会話を拒んでいるように思えた。

「ねえ、なんで和仁志さんは廊下で喋ろうとするの？」

「なんでって、またなの？あんな雰囲気の中で喋ってたら冷たい目で見られるわよ」

「でも、和仁志さんは、実はそれを望んでいるよね？誰とも喋らない生活を。違う？」

和仁志さんの表情が変わった。それは見る見るうちに酷く沈んでいき冷や汗がうつすらと出てきていた。凶星だったか、それとも。

「何言ってるの？」

搾り出すようにして出てきた言葉。

「僕には君が人との交流を拒んでいるようにしか思えないんだ。

一体どうして？」

「・・・」

沈黙の時間が続く。和仁志さんはこういう時間が好きなのだろうか？僕には到底理解できない。それも可愛いスタイルだってよい。実はモテモテなんじゃないかって思えてくる。

「・・・でしょ」

「えっ？」

何か聞こえた。でもよく聞き取れなかった。

「あなたには関係ない。あなたには関係の無い話よ」

怒鳴るわけでもなく、俯いた間沈んだ声で彼女はそういった。

たしかに過去のことには何かあったとしたら僕には本当に関係の無い話なのかもしれない。そんな話に僕が首を突っ込んであれやこれや言うのは嫌な奴と思われてもしょうがないくらいだ。

だけど、どんなに嫌な奴でも困っている人がいるなら助けてあげ

たい。手を差し伸べてあげたい。そんなの自己満足かもしれないけどしてみたい。

彼女は喋りたくない。人との会話、交流を拒んでいるのはたしかだ。だけど僕とはちゃんと受け答えしている。わずかな時間でもそれは立派に交流をもった時間だ。

和仁志さんは心から拒んでいるわけではない。そう思う。

「たしかに僕は関係ないね。転校してきたばっかだしいろいろとごめん」

「・・・私も転校してきたのよ」

和仁志さんはそう言った。

「詳しく聞かせてくれる？」

「・・・」

彼女は無言で首を横に振った。どうしてあんなこと喋っちゃったのだろうとか思っているんだろうか。でも、そう思っていたとしても、僕はそれがうれしかった。少し心を開いてくれたみたいで。

「そうか、無理に言わなくてもいいよ。ごめんね」

「謝らなくてもいいよ。じゃあ」

そついうと彼女は自分の席へと向かっていった。

*

～和仁志美耶～

私は自分の席へ戻った。

なんであんなことを喋ってしまったんだろう。言うつもりなんかなかった。喋るつもりもなかった。だけど口だけが勝手に動くような感じで、今までの辛い私を全部知ってもらいたいと思ってしまつて、口がすべった。

私が転校を聞かされたのは中3の2学期。進路決定も近くに迫ってきた時のことだった。誰も友達のいなかった私に救いの手が差し

伸べられたのである。

アリエルト学園。

そんな学校を私は聞いたこともなかった。そしてこの学校の生徒誰も知らない学校名だ。先生はこういった。あなたのことを一人も知らない高校に行けば再スタートが切れるかもしれない。だからこの高校に言ってみない？　そういわれた。

私は詳しくも調べないでその学校に転校したいと思っていた。私は楽しい学校生活を送りたかった。友達を作って、ただただ楽しい学校生活を送りたかったのだ。

そして私は転校した。中学3年の2学期にそう言われたので転校とは言えない特別な感じだった。

そして私は新しい自分の、楽しい学校生活が待っているかと思っていた。

だけどそれは違かった。

人との交流を持たないで転校してきた私に話しかけてきてくれる人は誰もいなかった。またクラス内でも喋っている人は誰もいない。暗闇に包まれた教室だった。

私から話しかければいい。たったそれだけのことが出来ない。たったそれだけのことなのに、私から話しかける・・・それが一番怖いことだったから。

私が完全に人と接したくないと思い始めた頃、一人の男子が転入してきた。

私にはまったく興味がなかったが、転入してきた子はいつの間にか出てきた上級生と仲良く喋っている。その光景が目に入ってしまった。

とても楽しそうに喋っている。これが理想の形なんじゃないかって気がしてきた。だから私は声をかけた。羨ましくて嫉ましかったから。

自分から声をかけるなんて一番嫌いなことだけど、そんなの転入してきたばかりの子だ。それにコノクラスに私の友達は一人もいない。嫌われて何ぼだと声をかけた。

「ちよつとあなた」

驚くほど恐ろしい声を出してしまった。第一印象は最悪だ。でも、もう気にすることもない。

「僕？」

向こうはそれほど気にかけている様子もなかった。私の冷たい言葉を受けても嫌そうな顔をしていない。こんなこと初めてだった。

それから私はどれだけ冷たい言葉を言っただろうか。もう自分の声が嫌でしうがな。何を言っただのかも忘れてしまった。もう話しかけるのは止めよう。そう決めた。

それでもあいつはしつこく話しかけてきた。話しかけてもらえればそれ相当の・・・と言ってもやっぱり他人から比べれば変だけど、少しだけ変わっているように思える。でもそう思っただけ私が自分自身を締め付ける。そんなに長く話しちゃいけない。自分から話しかけなくなってしまう。でも話したい。

もう私の頭はいっぱいだった。

だから口がすべってしまったのかもしれない。

でも・・・言っしまえば少しだけ楽になれた、かも。

*

僕はただただ授業を受けていた。
「私も転校してきたの」

その言葉を聞いた。少なくとも和仁志さんが喋ってくれた。今まで僕から話しかけていたのだが、あの時は口を開いてくれた。

これは大きな進歩だ。

体育際優勝はともかく、元気なクラスは目指せるんじゃないか。誰もが自分自身で心を閉ざしているわけではないはずだ。このクラスの雰囲気は吞まれてそうなっているに違いない。

その原因がどこにある。その一つとして考えられるのは自殺事件のことだ。

和仁志さんは自殺事件のことについてもまだ何か知っていそうだし、何より自殺した子と仲が良かったという僕の隣の席の子。その子に話を聞くのが一番だ。

そして僕が考えたことだが、和仁志さんは自殺事件が起きるまでは、少なからずとも僕の隣のことは喋れる関係だったのではないだろうか。だから和仁志さんを元気にして彼女にも元気になってもらうという作戦だ。

われながらいいかもしれない。

何か人の心を材料にしているみたいで罪悪感があるが仕方ない。

僕は次の休み時間も和仁志さんに話しかえることにした。

僕は授業終了と同時に廊下で待機した。相変わらず誰もいない廊下。喋り声も無く人も通らないがそれが今は助かっている。

和仁志さんは僕のことに気がついたのか、しぶしぶと言った感じで廊下に出てきてくれた。転校のことについてはあえて喋らないことにする。

「和仁志さんは、好きな食べ物は何？」

あーそうだよ。僕はダメダメですよー。

「急にどうしたの？」

「それくらいいいじゃない」

うん。と和仁志さんは考えている。考えるほど好きな食べ物は決まっていらないのだろうか。僕ならすぐさまハンバーグ和風ソースで。って答えるけど。

あーそうだよ。僕はお子ちゃまですよー。こうこうせいになってもハンバーグ大好き人間ですよーだ。

誰に言っているのだろうか？自分にだろう。

「これと言うのは無いけど、カレー甘口・・・かな。なっ、何よ」

「ああ、ごめん。何か子供っぽいんだね」

「なっ！んん」

反論できないらしい。

初めてかもしれない。いや初めてだ。

和仁志さんがこんなにも感情を持って話したところを見るのは。

「あんたの好きな食べ物は何よ」

ハンバーグと言ったら笑われた。

笑顔もすごく可愛かった。

しばらくはこのままでいいのかもしれない。

今気づけば体育祭優勝は来年でも出来るじゃないか。

1 - 2 話 休日の出来事

1 - 2 話 休日の出来事

「おはよう。幸平」

「ああ、おはよう」

今日も一日が始まる。部屋は男の部屋と言うだけあってそこまで綺麗と言うわけではない。でも掃除もまったくしていないというわけではないから拒絶されるほど汚くはないだろう。

物入れの中には、非常食用に買っておいたカップラーメンやら焼きそばなどが数個入っている。飲み物は冷蔵庫に。この部屋には冷凍庫がないのでアイスは買ったらずくに食べなくてはいけない。

ベッドは二段で後はテーブルが中心に一つ。そのテーブルが勉強用の机となっている・・・がテスト前以外はめったに使用されない。こんな感じの寮室となっている。

就寝時間に規則はないが、あまりうるさくすると寮長が来るという仕組みになっている。

食堂。

うん食堂。

いつもどおりの無言の食事風景が一面に広がっていた。食器の当たる音だけを聞いてくるとなぜか食欲を無くす。

よくみんなこんなところで食べられるなあ。

食堂の端には新聞紙がおかれている。テレビは寮室に一個ずつ配置されているので食堂にはない。まあ食堂にテレビがあったとしてもこの無言風景は変わらないだろう。

「幸平、部屋に行こうか」

「だな」

僕はサンドイッチを片手に寮へと戻った。

教室のドアを開ける。

もうこの雰囲気には慣れてしまった。

「おはよー」

和仁志さんの横を通り過ぎる前に挨拶をする。

「・・・おはよう」

蚊の鳴くようなめっちゃめっちゃ小さな声だったけど聞こえた。ん？
なんて言ったの？なんて意地悪だって出来たけど無視された昨日に
比べれば大きすぎる進歩だ。そう思っ僕は自分の席へとついた。
隣には俯いているだけの女の子。名前を確認したいのだがクラス
には名前の札など貼られてはいない。自分から聞くしか分かる方法
はない。

かと言って今話しかけるのはものすごく気まずい。きつと何を言
っても無視されることだろう。

なんだかやりきれない感があった。

いつもどおりの授業風景。これももう慣れた。多分この学校に授
業参観なんてないのだろう。

僕は休み時間に年間予定表を見てみた。案の定授業参観という項
目は一切入っていない。というより予定表に書かれていることが少
なすぎる。小テストはもちろんなし。間に中間テストと期末テスト
があつて後は僕たちには関係のない職員会議やら何やらが入ってい
る。

「お」

僕は2学期の10月に書かれている一項目を見た。

『2年。修学旅行』

「マジか」

本来なら嬉しいはずの修学旅行。だがこのままの雰囲気だったら

行く気は無くしてしまう。もうすでにその状態なのだ。場所は書いてはないが沖縄とか北海道とかその辺だろう。

それ以外は僕たちにかかわる行事は何もなかった。

「ちよつと来て」

僕は次の時間と仁志さんに話しかけられた。そして廊下に呼び出される。いつも話しかける役は僕だったので和仁さんから来てくれたのは非常に驚きだった。

「何？」

「あのね。そ、そのね。えーと」

何やらもじもじしている。いやもじもじはしていないのだが言葉がもじもじしている。

「なんで、さつきは・・・なんだ」

「ん？ん？なんか間の言葉が聞こえなかったんだけど」

「だから、来なかった？」

「はい？」

まずい話の脈絡がない。文脈が繋がっていない。もしかして和仁志さん国語めっちゃ苦手なんじゃないかな。

「分かれ！バカ」

そう言ってから和仁志さんはまた、しまったと言うような表情をしてすぐに普段どおりの表情に戻る。そんな和仁志さんをよく見る。さあ僕考える。

さつきは・・・なんだ？だから来なかった？

どういうことだろう。

その時僕の頭に二本線が出てきて、その線が繋がった。

さつきは来なかったんだ。なんでさつきは来なかったんだ。だ！

「何？おかしい？」

その言葉の意味がわかって僕はにやけてしまったのだろう。怒られてしまった。

「おかしくはないよ。そうだね、さつきはちよつと考え事してて」

「べ、別に寂しかったわけじゃないからね。なにかあったのかなとか思っただけだから」

「そ、そう。あはは、心配してくれてありがとう」

なんか、ものすごい典型的なツンデレなんですけど和仁志さん。

「ほ、ほら授業始まるわよ。私は戻るから」

「う、うん」

和仁志さん、何のために僕を呼び出したんだろう。そのことは謎だった。

つまらない授業が終わり休み時間。今度は起こられないようにすぐさま和仁志さんのところへ行くことにした。それに気づいてくれたのかアイコンタクトらしきものを済ました後廊下へ移動した。

「で？なんのよう」

「えええ？何の用って言われても」

「何もないのに呼び出したの？」

「それすっごい和仁志さんに言われたくないんだけど。じゃあさつきは和仁志さんは何のために呼び出したの？」

僕も少し反撃してみた。女の子をいじめるのは最悪だって言うけど、こういうのはスキシップだね。和仁志さんも起こっている様子は無いしむしろ困った顔をしている。

「そ、それはねっ！」

クレッシエンド口調で話し始める。

「苗字・・・嫌いだから名前で呼んで？」

「えっ、何で苗字嫌いな？」

そう聴いた瞬間、和仁志さんの額部分に怒りマークが付いたような気がした。

「うるさいわねっ、嫌いって言ったら嫌いなもの！嫌いじゃなくても嫌いなもの。素直に言うこと聞いておいて」

「う、うん。わかったよ」

和仁志さんって結構強引な人なんだな。

「でもなんて呼ぶの？美耶ちゃんでもいいの」

「うっ、なんかそう言われると気持ち悪いな」

「どっちだよ」

何を考えてこうしているのか僕の頭の中では理解不能です。

「ごめんね。それでいいよ、うん。そうよんで」

「わかった」

とりあえず話を終了すると和仁志・・・いや美也ちゃんは教室へ入っていつてしまった。この休み時間は結局名前がどうだこうだの話だけになってしまった。

いや本当に休み時間を有効活用してないね僕は。

*

週末。この学校の週末はやけに静か過ぎる。みんな自分の部屋で過ごしているからだろうか。学校内にもちろん人影はなく、寮内でも食事時以外はほとんど人を見かけない。外に出かける生徒もいないそんな休日だった。

とりあえず僕は幸平と外に出ていた。休日は外出許可も要らないので安心して外に出られる。

僕も外のことはよく知らなかったし、いい機会なので幸平にいろいろと教えてもらうことにした。

「幸平っていつも休日は何をしてたの」

「家で漫画読んでたりゲームしてたさ」

「うわっ、なにそれニート生活じゃないか」

「そんなこと言うなあ。俺だって好きでそんなことしているわけじゃないぞ。それにほらお前が来てからはこうやって外に出て遊んでいるんだ」

「あはは、そうだよな」

たしか幸平は中学時代るとき運動神経はかなり良いほうだったと記憶している。

僕たちは喫茶店に入った。

「どうだ？なかなかイケてる店だろ。デートにはもってこいの場所だな」

幸平が自慢げに話してくる。たしかに雰囲気も暖かい感じに包まれおり静かでいい場所だ。デートのことは考えなかったけど休憩場所にはうってつけかもしれない。

「食べ物も美味いしな」

そういつて幸平はパフェを一つ注文した。

「お前はいいのか？」

「僕はいいよ」

「そうか」

それから僕たちはゲーセン、本屋、デパート等一通り街を回った。大体のものはここで揃えられるし遊ぶ場所にも困らないと言うことがわかった。アリエルト学園は結構いい場所に建てられていたのだ。今日はぐるっと回っただけなのでお昼前に帰ってこれた。

「あちゃ、コンビニでなんか買って帰ればよかったなあー」

「お金無駄じゃない？」

「そうケチケチすんな。逃亡生活とかにならない限りはケチケチしてたらキリないぜ」

「それもそうかもね。まあとりあえず学食行こうか」

「あゝあ。学食も騒がしかったらいいんだけどね」

幸平が皮肉交じりでドアを開けた。

「うおおっ」

「きやあっ」

幸平が誰かと鉢合わせしたらしい。

僕が財布を捜している間に、幸平と鉢合わせした子が喋っている。きやあつて聞こえたから女の子だと思うけど・・・それに聞き覚えがあるような・・・いやある。うん。

「優介？お前さんに用事だった」

「うん。わかった」

美耶ちゃんか。どうしたんだろ。

僕は顔も見えてないけど人物を特定してドアの前まで歩いていった。まあ案の定そこには美耶ちゃんが立っていて、なんか不機嫌そうな顔をしている。僕は特に悪いことをしたような覚えはないんだけど。

「どうしたの美・・・!?」

僕は口を手でふさがれて引きずられるようにして連れ出された。

幸平がポカンとして立っている姿を確認できた。

ごめん幸平。

僕はとりあえず寮の門前までつれてこられた。

「どうしたんだよいきなり？」

「誰かいるのに名前では呼ばないでっ」

「なんで？名前で呼んでっで行ったの美耶ちゃんだよ」

「そうだけど・・・恥ずかしいのっ」

いや別に恥ずかしくはないと思うけどね。

「まあわかったよ。それで今日は何のようがあつて来たの？」

そういうと、美耶ちゃんは下を向いてモジモジしている。僕も大体分かってきた。こういうときは何か言いたいことがあるんだけど恥ずかしいから言えないパターンだ。

「僕が当ててみようか。一緒にお昼食べようでしょ」

美耶ちゃんの目がぱつと見開かれる。

「凶星みたいだね。じゃあせつかくだから外にでも食べに行こうか」

そして再び美耶ちゃんが俯いた。

が、それはいつものじゃなかった。

今回はないか深く考えこんでいるような、そんな感じ。

「ごめん。外はあんまり行きたくないの」

ゆっくりと重たい口が開かれて、美耶ちゃんはそう言った。暗く寂しく、どこかおびえた声で。

「そ、そつか。じゃあ食堂行こうか？」

そついうと美耶ちゃんは顔を上げて。

「う、うん。ごめんね」

笑顔はないけど、先ほどの表情は消え去っていた。

そこに一つの足音が近づいてきて僕たち二人を呼び止めた。

「新橋と和仁志。すまんがコレをコンビニでコピーしてくれないか？」

「先生・・・学校のコピー機はどうしたんですか？」

「壊れた。これ300枚だ。一人じゃ重たいから二人で頼む。俺もすることがあるんでな」

そついうと先生はそのまま通り過ぎて行ってしまった。
完全なパシリである。

「まあ仕方ないな。ぱつと行つて来ちゃおうか。あつ」

僕は美耶ちゃんが外に出たがらないのをさつき知ったばかりであった。顔を見るとそれだけでも調子が悪そうに見える。

300枚。かなりの量だけど、何とかなるか。

「いいよ。僕一人で行つてくるから、美耶ちゃんはお昼食べてて」

「えっ、それは悪いよ。私も行くから」

「でも、その・・・あんまり外出たくないんでしょ？それに幸平だつているから」

「だ、大丈夫だよ。優介君に悪いし、我慢するから大丈夫」

そついうと、美耶ちゃんは笑顔を作る。

それは、どう見てもつくり笑いではなかったのを僕は気づいていた。けど言わないままだった。

*

コンビニまでの道のりは少し遠いが、さつき幸平と行つたばかりなので道はしっかり覚えている。交通量は多めで近くにはアリエルト学園以外にも学校がいくつかあるので、学生も見かけることがあ

る。僕たちはコンビ二の前までたどり着いた。美耶ちゃんは終始下を俯いたままなので気になったが、しっかりと付いてきてくれた。

「あつ、先生お金も払わせる気かな。後で催促しない」と

僕は財布からお金を取り出してコピー機に神を置いた。

コピーといっても300枚だ。それなりに時間がかかる。その時間はかなり暇だったってくだらない話でもして時間をつぶした。くだらない話をするにつれて美耶ちゃんの元気が少しずつ戻っていった。安心して。

「あーそれでねー」

「そうそうー」

コンビ二に二人の女子高生が入ってきた。今時って感じの二人でバッグには大量のキーホルダなどを身に着けている。

「それであいつキモツとか思っちゃってさー」

「んーんー。ウチもキモイって思ってたんだよー」

「んでイジメが発生しちゃってねー。あいつなんて死んじやえばいいのにつて」

「うわー。それ酷すぎじゃないー」

なんて奴らだ。僕にはまったく関係ない話なんだけど、そういう話を聞いていると腹が立つてくる。僕にはどこの学校かも知らないのでやっぱりどうする事にも出来ないが。

コピー用紙はまだ時間がかかりそうだ。

「それでね美耶ちゃん」

僕は話の続きをしようとした。

「やめて」

「えっ?どうしたの」

「やめて」

「美耶ちゃん?」

「やめてやめてやめて」

美耶ちゃんが耳をふさぎこんで座り込んでしまった。

「それで相変わらずキモクってさあー」
「へえー。それはキモイねー」

相変わらず二人はそんな会話をしている。原因は多分あの二人だ。あの二人と美耶ちゃんがどんな関係があるのかわからないが、とりあえずどうにかしないといけない。

あの二人に注意するのは簡単なことだが、取り合えず僕は美耶ちゃんをコンビニの外に連れ出そうとした。幸いコンビニのコピー機は隅っこにあるため注目的にはなっていない。

僕はとりあえず美耶ちゃんの腕をつかむ。

「やめてお願いやめて。一人がいい。一人がいい」

美耶ちゃんは小さな声で呪文のように呟いている。

僕には何かなんだかわからない。一人にしてあげたいのはやまやまだが、ここではさすがにまずい。コピーのこよはどうでもいいとして何とかして美耶ちゃんを移動させたかった。

「一人がいい。友達いらない。一人でいいだからやめて。もうやめて」

しばらく小さな声で呟いていた美耶ちゃんは、何かを言い終わるとぱったりと倒れこんだ。

「・・・っ」

僕は美耶ちゃんをとりあえず抱きかかえてコンビニを出た。

そこでさすがに他の人に目撃されたが、気にしないことにした。

美耶ちゃんは眠っているだけだった。とりあえず幸平に連絡を入れてコピー用紙を持ってもらうことにした。幸平だったら30枚でもいけるだろう。

僕は美耶ちゃんをおんぶする形になって学校まで運んで言った。背中から寝言でも同じようなことを言っていた。

「一人でいい、やめてお願い、もういやだ、孤独にいるから、だからやめて」

と起きているのかと思えるくらいに。
美耶ちゃんはうなされていた。

＊

とりあえず美耶ちゃんを学校の保健室へと連れて行った。美耶ちゃんはまだうなされているらしく、顔色も表情も悪かった。

美耶ちゃんに何があったのかはわからない。あの二人と関係があるのかもしれないし、何もないのかもしれない。だけどこのまま放つてはおけない。

何があつたのかなんて、美耶ちゃんの辛い思いでも掘り返すことになってしまいかもしれない。だけどそのまま見過ごすなんて出来ない。出来ることなら助けてあげたいから。

とりあえず僕は保健室で起きるのを待つことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1076q/>

ふれんど♪

2011年1月22日00時26分発行